様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月　９日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０２５０
研究課題名（和文）　シェイクスピアの道化を演じる－道化の役作りに関する日英比較研究
研究課題名（英文）　Playing Shakespeare’s Fools and Clowns – a comparative study of ‘fool acting’ in Japan and the UK

研究代表者
阪本　久美子　（SAKAMOTO KUMIKO）
日本大学・生物資源科学部・准教授
研究者番号：５０３１９２４０

研究成果の概要（和文）：シェイクスピアの道化が、400 年以上の時を経て、日本および英国においてどのように演じられているか、現代の舞台でどのように再生されているかを検証した。職業道化という役を演じて観客を笑わせるという役作りもあれば、せりふに身体的コメディを追加して、観客からの反応を得ようとするアプローチもある。日本における問題は、結局のところ、翻訳という人工的な言語にあり、イギリス同様、道化を舞台上成功させることが難しくなっている。

研究成果の概要（英文）：This study explores how Shakespeare’s fools and clowns are resurrected for the modern stage both in Japan and Britain after more than 400 years. Some try to act out a perfect court jester pleasing both onstage and offstage audiences; some rely a little more heavily on physical comedy to elicit laughter from the audience. The Japanese actors equally suffer from Shakespeare’s language, in translation, which is inevitably awkward however hard a translator tries to find the equivalent of what sometimes is nonsensical.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	９００，０００	２７０，０００	１，１７０，０００
２００９年度	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００
２０１０年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	２，１００，０００	６３０，０００	２，７３０，０００

研究分野：英文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：シェイクスピア、上演研究、異文化演劇、比較演劇

１．研究開始当初の背景

道化を演じるプレッシャーは、日英の役者にとって共通の問題である。笑いのネタは特定の時代の特定の場所に帰属し、その時代の文化を反映していることが多い。従って、近現代のイギリス文化の一部である道化を現代

に再生させるのは、決して容易なことではない。

２．研究の目的

(1) 笑いが誘発できない「異文化」となったジョークや演技を検証し、現代に上演される際に問題となる点に関して仮説をたてる。

(2) 英語および日本語上演における道化の再生を、上演および批評（観客の側）の両面から検証する。

(3) (2)で行った英語および日本語上演の検証結果との比較を行い、道化および道化を登場人物に含んだシェイクスピア劇の上演における問題点を再度整理し、解決の可能性、どこまで解決できるか、解決の方法を論じ、「現代の道化」モデルを作る。

３．研究の方法

(1) オリジナルの道化を解明するために、近現代の道化役者に関する資料を調査する。

(2) イギリスおよび日本の上演（過去の上演記録も含め）を、実際に研究対象として検証する。

(3) 道化の現代舞台における再生の可能性として、「現代の道化」モデルを考案する。

４．研究成果

(1) シェイクスピアは自らの劇団（宮内大臣一座、後に国王一座）において、道化役者 William Kempe および後継者の Robert Armin のために道化のせりふを書いたと考えられている。ところが、昨今の研究から近現代演劇における芝居作りの過程が新たに解明され、道化役者はむしろ劇作家の共作者であるかのように、自らのせりふを提供していたことが推定される。道化は専門職であったことから考えると、このような分業も当然に思えるが、道化の独立性は作家から見るとやりにくい存在であったことも推測できる。道化のプロット上の役割を重視する研究が多い一方、実際には道化は物語の中で浮いている存在である。それでは、道化とは何か？道化のもうひとつの特色は、観客との関係である。舞台における道化は、観客と役者の共同作業により、芝居の進行中に作られていくものである。現存の道化のせりふも、観客からの反応（笑い）を受けたアドリブを含んだものである可能性があり、現代のコメディアン同様、流動的なパフォーマンスにより、練られた結果としてのせりふ、コメディの場面が出来上がったと考えられる。この調査により、道化と現代のコメディアンの接点が明確になった。

(2) 現代イギリスにおける道化の問題は、せりふに始まり、せりふに終わる。笑いのネタには時代性がある。400 年以上前にコメディとして成立したせりふは、現代イギリスでは通用しない。さらには、シェイクスピアの英語は初期現代語であり、現代語とは異なっており、耳からすんなりと理解できるものではない。つまり、語彙上、文法上、内容上すべてに問題があるのだ。役者によるこれらの問題の処理は、①道化という職業から宮廷における役割を考えて役作りをする、つまり道化である以上、笑いを誘わなければリアルにならないという Antony Sher のアプローチ、② Kempe を髣髴させる身体性を生かした演技で道化を再生した、フィジカル・シアターの代表的劇団、テアトル・ド・コンプリシテの創立者でもある Marcello Magni のアプローチの二種類が目立った。前者は、Christpher Luscombe、David Tennant、Simon Russell Beale、John Normington などのロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの役者に引き継がれ、後者も Jacques Lecoq の演劇学校で学んだ Miltos Yerolemou のアプローチにつな

がる。意外な発見は、せりふの重要性、せりふをきちんと聞かせた方が、たとえ身体的なコメディが追加されていても、舞台上成功するということだ。

(3) 日本における道化の問題は、イギリスの舞台と比べると言語上の問題というよりは、むしろ異文化という文化上の問題であると考えていたが、実際には翻訳という複雑な作業の後で作られた人工的なせりふを用いるというかせが、原語上演における初期現代語の使用と同様の問題を作り出していることがわかった。シェイクスピアの道化のせりふには意味不明のものも多いが、それらのせりふを訳するにあたり、翻訳家は多少の意味を持たせようとするものの、基本的には舞台上で不明確のままである場合が多い。小田島雄志による効果主義的な翻訳のアプローチも、ジョークの訳が多少ジョークらしくなったものの、翻訳がオリジナルに基づいたものである以上は限界がある。結果として、道化の身体性、舞台においてせりふに伴う身体的コメディが、道化の役の成功につながる。ところが、検証した上演作品においては、ほとんどの道化がせりふとつながりのない無意味な身体的コメディに依存している。その中で、『歌舞伎十二夜』という伝統芸能とシェイクスピアの試みが、道化の異文化移植を果たし、歌舞伎の世話物の役に仕立て上げていた。

(4) 「第四の壁」を破る存在であると言われる道化は、観客と最も近くなりえる存在である。イギリスでは三方を客席に囲まれた張り出し舞台において、役者と観客の距離が縮まり、同時に役者も異なったタイプの演技を要求され、観客との相互反応もありうるようになった。ロンドンのグローブ座の成功は、舞台における道化の表象の新たな可能性を見せたとも言える。一方、プロセニアム舞台ばかりで、役者と観客の間が明確に区切られた日本の舞台では、道化が生かされる可能性が少ない。物理的な違いと同時に、役者の芝居作りにおける立場が問題なのではないかと考えるにいたった。今回日英の比較を試みようとしたが、そのためには日本とイギリスにおける役者と演出家の関係の違いまで掘り下げて考えていく必要があるということが認識された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①阪本久美子、道化ランスロット・ゴボーは笑えるか？：道化の身体的演技に関する考察、西洋比較演劇研究、査読有、Vo. 10、2011、pp.

〔学会発表〕（計３件）

① 阪本久美子、The ‘Errors’ of the Errors: doubling, confusion and theatricality、日本シェイクスピア協会第 49 回大会、2010 年 10 月 16 日、福岡女学院大学

② 阪本久美子、笑いの再生：上演から見る道化の演じ方、早稲田大学演劇博物館グローバル COE、2010 年 7 月 17 日、早稲田大学

③ 阪本久美子、「異性配役(cross-gender casting)：日本における女装配役に関する試論」、日本シェイクスピア協会第 47 回大会、2008 年 10 月 12 日、岩手県立大学

〔図書〕（計２件）

① Dennis Ｋｅｎｎｅｄｙ，Ｙｏｎｇ Li Lan, Kumiko Hilberdink-Sakamoto 他、Shakespeare in Asia: contemporary performance、Cambridge University Press、2010

② 小林かおり、阪本久美子他、日本のシェイクスピア：上演研究の現在、風媒社、2010

６．研究組織
(1)研究代表者
阪本　久美子（SAKAMOTO KUMIKO）
日本大学・生物資源科学部・准教授
研究者番号：50319240